

穂高・上高地を行く(68会歩こう会) 報告 二〇〇九年六月九日、十日

鈴木 洋 (68回)

穂高・上高地……口にしたただけで、胸の中に甘酸っぱいような、なつかしい想いがこみあげて来る。この気持ちは山男だけのものではないはずだ。その穂

で高連道を降り新穂高温泉へ。谷川沿いを徐々に標高をあげて行く車窓からは、まだ新緑の柔らかなさを残している木々の若葉が眼に快い。「この新緑を覗いていると神々しい程だナア」

日頃の言動からは思いもよらない悟りすましたような声がある。それに呼応して「あらたふと青葉若葉の日の光……芭蕉が奥の細道で詠んだ心境もそんな感慨からなんだろうナア」などと声が続く。この歳まで生きてきた各々の山あり谷ありの人生の陰影が伝わってくる会話が車中に飛び交う。

新穂高温泉駅から二つのロープウェイを乗り継いで一挙に2,156mの高みに立つ。展望台からは北アルプスの槍、穂高、焼岳の雄大な峰々を存分に眺めることが出来た。この展望と山稜の間に、どれだけ多くの人達の喜びと汗と涙がながされたのか……などという感慨がふと頭をよぎる。

足元を覗くと残雪の間にキヌガサ草の白い大輪の花、エンレイ草、舞鶴草など季節の花々。そこから残雪の登山道に入り西穂山荘を経て丸山(2,452m)まで登る。

北アルプスの山嶺達は一段とくつきり指呼の間に迫ってくる。三時間羽の登山で汗を流し

て麓の新穂高温泉の「つくしんぼ」に投宿。宿の住所は高山市奥飛騨温泉で我々と同世代のおかみさん夫妻のひなびたもてなしが心にしみる。飛騨牛のステーキを堪能し翌日の行程に備えた。翌朝には宿の近辺から、槍ヶ岳の屹立した山容がさらにくつきりと望まれ、今回の山行きが一段と稔り多いものとなった。

車は前日の山道を曲折しながら大正池を経て上高地へ。今では大正池の象徴だった倒木もほとんど消えてしまったが、池越しに望む奥穂高は変わらない偉容で我々を迎えてくれた。七日にはウェストン祭が行われたばかりのウェストン碑に立ち寄り、河童橋を経て明神池をめざしスタート。奥穂高の真下を流れる滑溜な梓川の左岸、右岸を三時間ほどかけて周遊。道沿いには白い小梨の花、ラシヨウモンカズラの紫色の花が咲き乱れ、林床には紅花イチヤク草、野生ランのノビネドリが散見された。平日にもかかわらずさすが天下の上高地、大勢のハイカーが行き交い、昔と変わらぬ賑わいを見せていた。明神池畔には人馴れした鴨、木道には猿の群れも出没し、まさに上高地は今も別天地そのものだった。帰りには沢渡の日帰り温泉

で汗を流し「暮れゆくは白馬か、穂高は茜よ……」と山小屋の灯の一角を口ずさみながら帰途についた。

山行きとハイキング、今回も絶妙の行程を組み合わされて実施された「歩こう会」。

いつもながら森田、加藤(達)両君の行き届いたプランニングとアシスト。つくづく多士済々の68回の一員でいることの幸せを思う。

帰りの車中では、早くも次回への期待が話題になる。今回残念ながら、いろいろな事情で参加できなかった人達とはまた一緒に歩きたいと思う。車が長野県から新潟県にさしかかるあたりで、その日、信越地方も梅雨入りした模様とラジオが伝えていた。

参加者
飯利武志、岩原修爾、河西厚、加藤健一、加藤達雄、駒林進四郎、鈴木喜也、鈴木洋、藤崎昌彦、水本源弥、森田浩二、若林茂敬、若松昌弘



(カットは岩原修爾)